



## 注文の多い料理店（16）

扉には赤い字で、  
「お客様がた、ここで髪をき  
んとして、それからはきものの  
泥を落してください。」  
と書いてありました。  
「これはどうも尤もだ。<sup>もっと</sup>僕もさっ  
き玄関で、山のなかだとおもって  
見くびったんだよ」  
「作法の厳しい家だ。きっとよほ  
ど偉い人たちが、たびたび来るん



## 注文の多い料理店（17）

だ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互たがいによりそって、扇をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。



## 注文の多い料理店（18）

早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。



## 注文の多い料理店（19）

「なるほど、鉄砲を持ってものを  
食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終來  
ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解  
いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり  
下さい。」

「どうだ、とるか。」



## 注文の多い料理店（20）

「仕方ない、とろう。たしかによ  
っぽどえらいひとなんだ。奥に来  
ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを  
釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあ  
るいて扉の中にはいりました。

つづく